

《書評》

何彬著 日本僑報社

『中国東南地域の民俗誌的研究
——漢族の葬儀・死後祭祀と墓地』

(成城大学民俗学研究所研究員) 森 和

本書は、著者が1980年代後半から行ってきた墓や葬儀、死後の諸習俗に関するフィールドワークの記録とその分析、考察である。その構成は以下に示すとおり、序論、それぞれ3章とまとめからなる3つの部、終章と続き、そして最後にあとがきと参考文献を附す。

序論 課題と方法

第一部 葬儀と葬法の解説

第一章 階層と葬儀

第二章 葬法とその変遷

第三章 葬儀葬法と靈魂

第一部のまとめ

第二部 死後祭祀と祖先観

第一章 死の正統性と非正統性

第二章 「中元節」の主役

第三章 死後祭祀の深層

第二部のまとめ

第三部 墓と墓地の深層

第一章 墓・墓地の形態

第二章 墓と「風水」

第三章 墓地と他界

第三部のまとめ

終章

あとがき

参考文献

著者がフィールドワークを行ってきた地域は広く、中国各地に及ぶが、本書で対象とされているのは「東南地区（中国の東南沿海地域を指す。上海・江蘇・浙江・福建・台湾等の地区を含む）」であり、中でも特に福建・浙江両省に重点が置か

れている。著者はこの地域の漢族の葬儀・葬法と死後祭祀を研究するにあたり、序論の中でまず中国全体を視野に入れた問題提起をし、先行研究を挙げて課題を示してから、研究プロセスを「有形の民俗器物→民俗行為→無形の民俗観念」と明確に図式化し、具体的には、墓・墳墓・墓地の分析、それによる漢民族の民俗観念（他界観・祖先観・靈魂観）の読解、漢族の死に関する認識の再構成、という手順を提示する。そして「葬」や「墓」、「民葬（漢語の「国葬」「公葬」に対する庶民の葬儀、民間人の葬儀を表す著者の造語）」など本書で用いられる基本用語の定義を示した上で本論に入ってゆく。

第一部は「葬儀（死者のために営まれる、死者を偲び、家から送り出す儀式）」および「葬法（死者の遺体を処理、安置する一定の方法）」について論じる。まず第一章では『大明会典』や『欽定大清会典』など明清時代の総合法典に記された士・庶民の葬儀、中華民国成立後の袁世凱・孫文ら4人の国葬・公葬、そして著者のフィールドワークに基づく11の民間葬儀の事例を示し、それぞれの相違を対照表に整理する。次に第二章で、葬法について土葬と火葬の歴史的展開を確認してから、浙江・福建における葬法を4分類し、この地域に多く見られた「厝（葬儀後、二次葬の前段階として柩（遺体が納められた棺）を山や空き地、小屋に置く、あるいは浅く埋めること）」について9の調査事例を示して分析する。第三章では、葬儀事例から魂の居場所、特に墓と魂の関係を探り、漢族民間の靈魂観は「靈体一致」「靈骨一体」（霊がいつまでも体か骨と一体的に存在する）という考えが主流的であると結論し、死者の靈魂との交流の媒介役となる「巫」について歴史や現状、職能などを9人の事例に基づき分析する。

第二部は葬儀・埋葬の後、数年のうちに行われる死者の靈魂を祭祀する各種の行動について論じる。まず第一章では人の死は正統／非正統という

2種類に分けられ、葬儀や死後祭祀もそれにより異なることを確認した上で、地方誌から定期的な死後祭祀（清明節、中元節、普度・盂蘭盆会）の全国的な分布状況を整理し、第一部第一章で示した11の民間葬儀の事例と別の調査3例に不定期／定期的死後祭祀事例を加える形でその時期・場所・規模の3点から分析する。第二章では東南地域における中元節とそれと同時期に行われる普度（仏教寺院で行う済度法事「普度衆生」の略称に由来する祖先および他者の霊を祀る祭祀儀礼。旧暦7月15日に行われ、現在の儀礼は道教・仏教の要素と民間の意識が融合して形成されたとされる）について4区域14例の事例を列举し、祭祀対象となる霊の区別やそれに基づく祭祀時間や行為の相違について分析する。第三章は3類に区分される祭祀対象となる霊のうち、「祖先（第一の霊）」と「家鬼（第二の霊）」について一族の内部の目という角度から検討を加え、「祖先」になる資格や細分類、祖先との交流の方法や必要性について論じる。

第三部で扱われる主題は墓と墓地、すなわち本書で「遺体が置かれる固定的な場所」と定義される施設とその集合体、周辺を含む場所である。第一章ではまず墓・墓地の形態の変遷を旧石器時代から中華民国時代まで歴史的に整理した後、東南地域の墓についてフィールドワークで得られた資料49例を示して墓の類型とその地域的分布の傾向を論じ、夫婦墓・家族墓という墓地の形態について検討する。第二章はまず風水思想の発生と発展、基本概念などを確認し、それが現代人の日常といかに深く関わっているのかを2、3の具体的な事例を挙げて説明する。さらに東南地域の農村部における陰宅（墓）風水に関する3つの聞き取り事例からその信仰が東南地域に強く残っていることを示し、陰宅風水の基本構造を4人の風水師（地理先生）の実例から明らかにする。そして福建・浙江に見える北方漢族と異なる形の墓（椅子墳・

亀殻墓）と風水の関係、墓守り・墓参りの重要性和実用性について論じる。第三章では雲南省麗江地域の納西（ナシ）族がもつ二重他界観念（靈魂の送り先として死に方によって「祖先の所」と「玉龍第三国」という2つの異なる他界を設定している）の構造、漢族の民間葬儀における「暖壙（柩を墓に納める直前ないし前日に火鉢を置き、墓穴の内部を暖める行為）」と「送火種（葬儀後に竹籠や薪を墓前に置いたり、藁束や紙を燃やしたりする行為）」から窺える他界観、東南地域における伝統的な葬儀の「守夜（通夜）」の法事で掛けられる「十殿閻羅図」に示された他界、東南地域で人間と霊との交流を仲介する10人の巫が語る他界、という4種類の他界について事例を挙げ、その構造を解析する。

終章では、以上のような議論を承けて各部ごとの検討結果が整理された後、東南地域における遺体の処置手段、漢族民間の靈魂観、漢族の他界観、祀られる祖先の分類、椅子墳・亀殻墓の位置づけおよび風水との関係、墓地の民俗的な意味と機能、という6点についての結論が示され、最後に経済発展と都市化の進展、さらに行政的・政治的な関与などによる葬儀や葬法、墓、死をめぐる諸観念の急激な変化という今後の研究で加速度的に究明すべき課題を提起して議論を締め括る。

以上、構成と内容を簡単に紹介したところで、2000年以上遡る戦国～秦漢時代の簡帛資料を主として中国古代の宗教文化を研究している評者の目から本書の魅力や感想、気づいた点などを述べてゆきたい。

まず何よりも先に本書の最大の魅力として挙げるべきは、議論の中で提示される膨大かつ精緻な調査事例の数々であろう。著者自身が述べるように「葬送儀礼、葬法および祖先観・靈魂観・他界観を対象とした東南地域の先行研究はあまり多くみられ」（22頁）ず、また葬儀などは調査以前に関係のない他者の介入そのものを忌避されること

も多いであろうと想像できる中で、10を越える民間葬儀や死後祭祀あるいは巫の職掌や他界観の事例などが記録されていることは、それ自体が大きな民俗資料として大きな意義をもっている。ただ一点、民間葬儀や巫の事例などに調査年が明記されていないことが惜まれる。著者が行ったフィールドワークの時期・地域についてはあとがきに要約されているが、「数年連続して一カ所の村や町に通うという反復調査」(299頁)もあり、個々の事例は必ずしも対応しない。また巫についてもアルファベットで代記した県・鎮や名前、性別、年齢(何十代)まで記す一方で、それがいつの時点のことであるのかわからない。特に巫の事例は個人が地域や名前を代記しても特定される可能性が零ではないことによるのかも知れないが、近年の経済発展などによる民俗事例の急激な変化を考えるならば、少なくとも調査年は資料として記すべきではなかったかと思う。

とはいえ、これらの膨大な調査事例は単なる羅列に止まらず、要所要所で表に整理され、筆者が「現地資料で得られた資料を中心に、文献研究の成果を参照しながら複合的に議論を展開」するのに大きな効果を発揮しており、それによる論旨のわかりやすさは研究書として高く評価すべきであろう。そのような議論から導き出された結論はいずれもおおむね穏当なものと思われ、それゆえに古代史の固定観念に凝り固まった頭がはっとするような刺激も受けた。

一つは第一部で明らかにされる、東南地域における漢族民間において主流とされる一つの魂が遺体や骨に付き、墓や位牌、祠堂を必要に応じて行き来できるという「霊体一致」「霊骨一体」の霊魂観である。著者も引く『礼記』郊特牲篇の「魂気は天に帰し、形魄は地に帰す」という記述に代表されるように、古典に類見する魂魄説をおよそ古代の常識のように考えていた評者にとって、この霊魂観は時代や階層を異にするとはいえ、大き

な驚きであった。と同時に、有識階層の認識や「礼制」と庶民層のこの霊魂観や地下他界観とのズレが支配階級による規定と深層の民間観念とが重層的に絡み合った民間葬儀のプロセスにおいて解説できない矛盾する項目を発生させたとする著者の指摘(99~100頁)に深く考えさせられた。また第三部で論じられる、東南地域の漢族の一つしかない地下他界観・縦軸式他界観も同様である。秦の始皇帝陵や漢代の磚室墓を例に挙げるまでもなく、本質的に墓のイメージと結びついた地下他界観は古代から確認されるが、その一方で秦漢時代には死者の霊魂が不死の理想世界である崑崙山へ昇るといふ山上他界観が併存していたとされる。そうであるならば、これらの民俗調査で明らかにされた「霊体一致」なる霊魂観や一重の地下他界観が古代以来の魂魄説や複数の他界観とどのような関係があり、どのような過程を経て成立したのが問題となるだろう。ただし、これは著者に解明を求めるよりも、本書から評者のような歴史研究者に与えられた課題であるかも知れない。

もう一つは、フィールドワークの事例と古代社会との意外な共通点、例えば、第二部で述べられる死に方によって区別される祖先の分類や墓参りの際の上限、巫の事例などである。前者について著者は第二部で中元節と普度儀式の事例分析に基づき、東南地域の複合型霊魂祭祀儀礼における祭祀対象が「祖先」(第一の霊)・血縁関係があるものの、「祖先」の規準に達していない「家鬼」などの霊(第二の霊)・犯罪者や不慮の死により一族に祭祀されない「野鬼」などの霊(第三の霊)から構成され、同じ中元節や普度の中でも祭祀を行う時間帯や場所が異なると結論づける。このような祭祀において区別される祖先ないし死者は、戦国時代長江中流域に栄えた楚の墓から出土する「卜筮祭禱簡」と呼ばれる竹簡資料にも確認され、子孫のいない親族の死者「絶無後者」「兄弟無後者」、夭折者あるいは戦死者を指すとされる「殤」

は第二の霊に、また親族以外の戦死者「兵死」や罪無くして死んだ「不幸」は第三の霊に、それぞれ相当するとみて良いであろう。また墓参りにおいて永遠に祖先祭祀をすべきという観念上の永久性と実際には三代あるいは五代上の祖先の墓までで全てに対して行われているわけではないという行為との矛盾性について、著者は祠堂での祭祀により解決されているとするが、その淵源はやはり『礼記』玉制篇に「天子は七廟、三昭三穆太祖の廟と与せて七。諸侯は五廟、二昭二穆、太祖の廟と与せて五。大夫は三廟、一昭一穆、太祖の廟と与せて三。士は一廟。庶人は寝に祭る」とある宗廟における祖先祭祀にまで遡り得ることも考えられる。仮にそうであるならば、東南地域の葬俗には道教や仏教の他に、当事者が意識するしないに拘わらず、儒家的な「礼制」も何らかの影響を与えている可能性も出てこよう。さらに第一部および第三部で巫の事例として挙げられている職能や他界との関わりについても、伝世文献や出土簡帛資料に散在する「巫」に関する記述と部分的に一致するところがあり、資料の少ない中国古代の「巫」とそれを取り巻く社会的環境を考える上で有力な手がかりになると思われる。当然ながら、現代における民俗事例と古代の資料を直線的に結びつけることは厳に慎まなければならないが、本書が研究対象とする民俗事例の多くがかつてほとんど記録されることなく失われた分野であることを踏まえると、現代社会における民俗資料としての価値だけでなく、過去の民俗を研究する場合にも補完的な資料として一定の有効性をもっていると言えよう。

やや中国古代との関わりを強調しすぎたきらいもあるが、これはとりまおさず本書がその対象とする地域や時代を越えて議論すべきある意味普遍的な問題を扱っていることの証左でもある。

古代から離れ、純粹に現在の民俗事例として見た場合でも、「撿骨再葬」の二次葬を前提とする

「厝」の習慣や東南地域に特徴的な「椅子墳」「亀殻墓」の事例の風水思想との関係は、評者の不勉強もあって新たな知見が多く、非常に興味深い議論である。中でも後者の墓について、東南地域では一般的に家屋よりも墓を重要視し、墓地を探したり、墓を造ったりする場合にのみ「風水」の語を使用するが、そこに子孫のために良い墓の立地「風水宝地」を追求する切なる願いが示されると述べた上で、宋代あたりからあるとされるこの2種類の墓が風水に理想的な自然の環境を探し出すのではなく、地形に左右されずに理想の「風水宝地」をみずから人工的に揃えた「風水宝地」のミニモデルであると位置づけ、風水師に頼まなくても模倣で間に合うという経済的側面からその流行を読み解く一段(第三部)は特に鮮やかに感じられ、蒙を啓かれたような思いがした。

最後に、評者の力不足のため、個人的な関心からの外的で偏った指摘に終始してしまった点について、著者に深くお詫び申し上げます。と同時に、本書が第16回華人学術賞の受賞作品であることを附言して、分野を問わず読者諸賢にこの良書の一読をお薦めし、拙い筆を擱くことにする。

(2013年12月刊、308ページ、9,800円+税)

